

文化・芸術

「作品」

1977年、ラッカー、カンバス
53・0cm×45・5cm

田中敦子 (1923~2005年)

田中敦子といえは、戦後の日本の現代美術を象徴する具体美術協会のメンバーとして知られています。吉原治良を中心に、メンバーたちは既成の表現にとらわれることなく、とっぴな、パフォーマンスや体全身で絵の具とたたかうような平面表現をくりひろげていきました。現在では、「具体 (GUTAI)」というと前衛運動として国際的にも高く評価されています。

そのなかで、田中は、1950年代後半から、「電気服」と題して全身に色とりどりに明滅する電球、電管をまとい、パフォーマンスをしました。そして「電気服」と並行して、この作品のように、電球の延長としての大小の円形と、電線をおもわせる円形にからまる無数の線によって構成された「絵画」を描きはじめました。さて、「具体」まで視野にいれてコレクションに加えていた大川栄二の幅のひろさをあらためて知る作品でもあります。

(田中)

《名画の扉》

大川美術館企画展から

